

発達障害に対する社会の認知度

－生活しやすい環境を作るには－

東京都市大学人間科学部児童学科 3年 相談援助・社会福祉研究室

市川 千彩音、須藤 彩花、富田 ひな、山田 綾香

(発達障害 生活しやすい環境 認知度)

1. 目的

発達障害に対して周囲の理解や社会における支援が不足している現状から、同世代の若者が発達障害に対してどのような印象を持っているのかを調査した。そして、生活しやすい社会を作るためには何が必要かを明らかにすることを目的とした。

2. 実践内容

・アンケート調査を実施

対象者…大学生 103 人（保育を学んでいる人 69 人，学んでいない人 34 人）

〈アンケート内容〉

- ① 保育を学んでいない人…発達障害に対してどのようなイメージを持っているか。
発達障害のある人とどのように関わっていくことが大切だと考えるか
- ② 保育を学んでいる人…関わったことがある人⇔関わってみてどのように感じたか。
関わったことがない人⇔学ぶ前にどのようなイメージを持っていたか
- ③ 全員…発達障害のある人とどのように関わっていくことが大切だと考えるか

3. 結果

①保育を学んでいない人

どのような障害なのか認識できていない、外で見かけたら怖い時もあるという回答が得られた。

⇒発達障害を認知していても特性や症状を正しく理解できていないことが多く、あまり良いイメージを持たれていないことが分かった。

②保育を学んでいる人

・関わったことがある人→発達障害について学ぶ前はコミュニケーションや意思疎通を取ることの難しさや関わり方への戸惑いを感じていたが、学んだことによって障害についての理解が深まったという回答が得られた。

・関わったことがない人→学ぶ前は悲観的なイメージや近寄りがたいイメージを持っていたが、学んだことによって1つの個性として受け入れることができるようになったという回答が得られた。

⇒発達障害について学ぶ機会の有無によって、発達障害についての捉え方に差があることが分かった。

③ 全員

障害を正しく理解して接していくこと、適切な配慮をすること、偏見を持たないこと、障害者も平等に生活できるような社会づくりをすることが大切等という意見が出た。

